令和７年度　　学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立小松工業高等学校

重点目標		具体的取組		主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	分析（結果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
1	主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善により、生徒の基礎的な知識・技能の定着とともに思考力・判断力・表現力・コミュニケーション力等の育成を図る。	①	生徒の基礎学力の定着と授業規律の確保を目指す。また、主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善を行い、意図的に生徒が表現する場面を確保する。	教務課 各教科	授業規律の確保と生徒の学習意欲の向上、基礎学力の定着が課題となっている。生徒の実態に鑑み、学習意欲を喚起するとともに、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善が求められている。	＜努力指標＞ 自他動画視聴を行い、積極的にアドバイスを行うことにより、授業の改善を行う。	授業撮影を行い、視聴し意見交換を実施して、授業改善に繋がった教員が Ａ　７０％以上である。 Ｂ　６５％以上である。 Ｃ　５０％以上である。 Ｄ　５０％未満である。	（教務課・各教科） 最終評価（Ａ）86.8％ 昨年度に引き続き、授業の様子を撮影した動画を自他視聴し、積極的にアドバイスを行った。前期の取り組みがなかった教員に積極的に働きかけ実施してもらい、最終的に85％以上の結果となり、授業改善に繋がった。更なる授業改善を図るよう次年度の継続の有無については効果的な方策も含め検討していく。
						＜努力指標＞ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組む。	主体的・対話的で深い学びの視点に立って、授業改善に取り組んだ教員の割合が Ａ　９０％以上である。 Ｂ　８０％以上である。 Ｃ　７０％以上である。 Ｄ　７０％未満である。	（教務課・各教科） 最終評価（Ｂ）80％ 生徒の学習状況を的確に把握し、実態に応じて工夫しながら授業改善に取り組んでいる。 次年度も引き続き授業改善に取り組む。
						＜努力指標＞ AI等を適切に活用し、授業をはじめとする業務の効率化に取り組む。	AI等を適切に活用し、授業をはじめとする業務の効率化に取り組んだ教員が Ａ　７０％以上である。 Ｂ　６５％以上である。 Ｃ　５０％以上である。 Ｄ　５０％未満である。	（教務課・各教科） 最終評価（Ｃ）64％ 前期は、AIを適切に活用し業務の効率化に取り組んだ教員が74％であったが、後期は活用している教員が一部に限られる状況も見られ、最終的には64％にとどまった。AIを効果的に活用することで業務改善につながることを実感できるよう、次年度も引き続き、適切な活用に向けた情報共有を図っていく。
		②	小松工業ラーニングコンパスを活用し、育む資質・能力を明確にした上で授業を実践する。	教務課 各教科	本校の教育目標に照らし、地域に求められる質の高い学力を身につけさせることが求められている。	＜満足度指標＞ 各教科の指導により、学習内容の理解が深まったと感じる。	授業の中でクラスメイトとの協働的な学びを通して異なる考え方が組み合わさり、学びが深まった経験のある生徒が Ａ　８０％以上である。 Ｂ　７０％以上である。 Ｃ　６０％以上である。 Ｄ　６０％未満である。	（教務課・各教科） 最終評価（Ａ）89％ 授業を通じて課題発見力・解決力がついたと感じている生徒の割合が89％と昨年同様に高い割合を維持しており、１人１台端末が有効に活用されている結果である。 次年度も引き続き育む資質・能力を明確にした上で授業を実践していく。
2	ものづくりによる実践的な技術・技能の習得や、デュアルシステム等の体験的学習の一層の充実により、有為な産業人の育成と生徒の適性に応じた進路の実現を図る。	①	専門高校における知識・技能の習得のバロメーターである資格取得・検定合格に向けて積極的に取り組む。また、ものづくりの技術を向上させ、各種大会等で成果を上げる。	学年会 各学科 部活動	目標とする資格・検定指導を戦略的に推進する必要がある。また、各種コンテストに積極的に参加し、同年代の同じ目標をもつ集団の中で切磋琢磨しながら成果を上げていくことが求められている。	＜成果指標＞ 資格・検定指導を推進し、ジュニアマイスターの認定者を多く輩出する。	ジュニアマイスターブロンズ以上の認定者および認定者と同等のポイントを有する生徒の人数が、 Ａ　７５名以上である。 Ｂ　６５名以上である。 Ｃ　５５名以上である。 Ｄ　５５名未満である。	（学年会・各学科・部活動） 最終評価（Ｂ）97名 多くの生徒が各種検定、資格の取得に向けて意欲的に取り組んでいるが、最終的に（Ａ）で前年度を27人上回った。 次年度も最終評価（Ａ）を目指し、各種検定、資格取得に向け、手厚い指導に取り組む。
						＜満足度指標＞ 工業の専門科目の技能が身についたと感じる。	授業により、専門科目の技能が身に付き、課題を発見する力、解決する力がついたと感じている生徒が、 Ａ　８５％以上である。 Ｂ　７５％以上である。 Ｃ　６５％以上である。 Ｄ　６５％未満である。	（学年会・各学科・部活動） 最終評価（Ａ）96％ 本校の特色である工業に関する専門的な学習活動や体験、各種大会の取り組みにより、９割以上の生徒が必要な資質、能力が身についたと実感している。
						＜成果指標＞ ものづくり大会やロボットコンテスト等のコンテストにおいて上位進出を目指す。	今年度のものづくり大会やロボットコンテスト等のコンテストにおいて Ａ 全国大会で上位に入賞することができた。 Ｂ 全国大会に出場することができた。 Ｃ 北信越大会に出場することができた。 Ｄ 県大会出場にとどまった。	（学年会・各学科・部活動） 最終評価（Ｃ） 各種ものづくり大会とコンテストにおいて、北信越大会の出場は果たしたものの、全国大会への出場はならなかった。次年度も全国大会に出場し上位入賞することを目標に取り組む。
		②	進路実現を確実なものとするため、インターンシップ、デュアルシステム等の体験的学習を積極的に取り組むとともに、学習の習慣化と基礎学力の充実・定着を図る。	教務課 進路指導課 学年会 各教科	部活動に熱心に取り組んでいる生徒も多いが、一方で学習時間の確保に苦労している生徒も見受けられる。部活動との両立が重要課題である。	＜努力指標＞ 学習と部活動の両立を目指し、気概と努力が大切であると実感させる。	学習と部活動を両立できたと答える生徒が Ａ　８０％以上である。 Ｂ　７０％以上である。 Ｃ　６０％以上である。 Ｄ　６０％未満である。	（教務課・進路指導課・学年会・各教科） 最終評価（Ｂ）77％ 前年度よりわずかに下回った結果となったが、活動にメリハリをつけて取り組むことで、多くの生徒が学習と部活動を両立できた。次年度も引き続き学習の習慣化をさらに充実させる必要がある。

学校関係者評価委員会の評価	・教員によるAIの活用状況および授業撮影動画の具体的な活用方法についてどのように取り組んでいるか。 ・アンケート結果については、数値に表れない意見や記述内容にも注視することの重要性についてどのようにとらえているか。 ・資格取得に積極的に取り組む生徒が多く、学校行事や部活動にも意欲的に参加しており、これらの経験が将来社会に出た際に生かされることへの期待をどのようにとらえているか。
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策	・年間を通して、AIを活用できる場面において、教育効果を高めたり、業務改善につながるように効果的な活用に取り組む。 ・アンケート結果については、学年・学科・クラスごとに比較しながら分析を行い、数値のみで直ちに評価できない項目については記述内容にも注目して慎重な判断のもと取り組む。 ・本校の特色である工業の専門教育の一層の充実を図り、資格取得についても継続的に支援する。また、学校行事や部活動を通して、地域社会に貢献できる生徒の育成を目指し、有意義な学習機会となるよう取り組む。

令和７年度　　学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立小松工業高等学校

	重点目標		具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	分析（結果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
3	学校生活全般を通して、生徒の規範意識を高め、安全・安心な学校づくりを目指すとともに社会人として必要な人間力を備えた人材の育成を図る。	①	生徒が積極的に学校行事、部活動に参加し、県内外で成果をあげることで、周囲の期待に応えられるよう、学校行事や部活動の活性化に取り組む。	生徒会課 部活動 学年会	生徒は、学校行事や部活動に積極的に参加しているが、さらに主体的に活動できる生徒を増やし、生徒がつくる学校行事や主体的に活動できる部活動を目指して、人間力の育成を図ることが求められている。	＜成果指標＞ 生徒会が中心となって行う学校行事。	生徒会が中心となって行う学校行事（体育祭・工業祭・球技大会等）に自ら進んで参加できた生徒が、 Ａ　８０％以上である。 Ｂ　７０％以上である。 Ｃ　６０％以上である。 Ｄ　６０％未満である。	（生徒会課・部活動・学年会） 最終評価（Ａ）97％ 後期には体育祭、工業祭など大きな学校行事があり、生徒たちは意欲的に参加していた。生徒が主体的に取り組めるよう、更なる内容の工夫、充実を図りたい。
						＜成果指標＞ 県総体での上位進出の状況をみる。	県総体の成績で団体、個人ベスト４以上の種目が Ａ　１５種目以上あった Ｂ　１０～１４種目であった。 Ｃ　７～９種目であった。 Ｄ　７種目未満であった。	（生徒会課・部活動・学年会） 最終評価（Ａ）27種目 昨年度より種目は減少したが上位の成績を収めた個人、団体が27種目となった。部活動は本校の特色の一つとして位置づけられており、県から強化指定されている部活動を中心に活発に取り組んでいる成果である。
		②	品位ある服装、爽やかな挨拶、時間厳守等、進路実現に直結する生活姿勢の改善に生徒自らが意識して取り組むよう指導する。個別指導が必要な生徒に対しては家庭と連携して指導する。また、「いじめとは何か」を題材とした学年集会などを通して安全・安心な学校及び生徒の規範意識の確立に取り組む。特に、交通ルールの遵守及び交通マナーの実践を習慣づけるため、交通安全教室等の機会をとらえ、年間を通して指導する。	生徒指導課 生徒会課 教育相談 学年会 全職員	校長の指導の下、生徒指導課をはじめ全教職員の協力により、生徒に寄り添う指導効果が実り、生徒の規範意識は向上し、特別指導件数は減少している。一方、遅刻件数は一定数の常習的な遅刻者が存在し、全体として件数は増加した。また、自転車交通違反指導件数は前年度と比較し大幅な増加となり危険な状況である。今後も、各種関係機関との連携を図りながら規範意識を高める必要がある。	＜成果指標＞ 遅刻件数の前年度比から判断する。	前年度と比較し、遅刻件数が Ａ　２０％以上減少した。 Ｂ　０～２０％未満減少した。 Ｃ　５％未満増加した。 Ｄ　５％以上増加した。	（生徒指導課・生徒会課・教育相談・学年会・全職員） 最終評価（Ｄ）30.7％増 一部の特定生徒が遅刻を繰り返していることや体調不良による生徒増加傾向にあることが要因で減少大幅に増加した。一部の生徒を除けばほとんどの生徒が遅刻をせずに登校しており、次年度は遅刻件数より無遅刻の件数を達成度の判断基準とするよう検討する。
						＜成果指標＞ 自転車交通違反指導件数の前年度比から判断する。	前年度と比較し、違反件数が Ａ　３０％以上減少した。 Ｂ　２０～２９％減少した。 Ｃ　１０～１９％減少した。 Ｄ　１０％未満であった。	（生徒指導課・生徒会課・教育相談・学年会・全職員） 最終評価（Ｄ）10％増　40件→44件 自転車の並進で指導されることが多く、自転車の乗車ルール、マナーの順守を徹底することが必要である。令和8年度より道路交通法が改正され自転での違反も検挙対象となることから引き続き、各種関係機関との連携を図りながら規範意識を高めるよう指導していく。
						＜満足度指標＞ 生徒の自己評価から判断する。	自ら進んで挨拶できたと答える生徒が、 Ａ　８５％以上である。 Ｂ　７５％以上である。 Ｃ　７０％以上である。 Ｄ　７０％未満である。	（生徒指導課・生徒会課・教育相談・学年会・全職員） 最終評価（Ａ）98％ 98％と高い水準の評価となった。次年度も継続できるよう取り組んでいく。
						＜努力目標＞ 生徒の状況を的確に把握し、いじめの未然防止・早期発見や生徒一人一人の成長に応じた指導に努める。	生徒情報を共有し、いじめ問題を未然に防ぐよう努めるとともに、問題発生時には早期対応できている教員が、 Ａ　９０％以上である。 Ｂ　８０％以上である。 Ｃ　７０％以上である。 Ｄ　７０％未満である。	（生徒指導課・生徒会課・教育相談・学年会・全職員） 最終評価（Ａ）96％ 教員は非常に敏感に反応している。 引き続き生徒の状況を的確に把握し、いじめの未然防止・早期発見や生徒一人一人の成長に応じた指導に努めていきたい。
4	地域貢献活動「こま工Factory」をはじめ、本校の魅力やものづくりの楽しさに関する情報発信の充実を図る。	①	本校の魅力やものづくりの楽しさを伝えるため、見てわかる情報コンテンツを積極的活用する。また、地域貢献活動「こま工Factory」の周知活動を充実させ地域貢献に努める。	全職員	中学校での説明会、中学生の保護者、教員対象の説明会を開催し、本校の特色や魅力を伝えることができた。また、４件の地域貢献活動に取り組むことができた。	＜努力目標＞ 学校ＨＰの更なる工夫、学校紹介のプレゼンデータの更新、外部機関（市教委等）との連携、学校行事の充実や地域貢献活動を推進する。	地域貢献活動、情報発信について校外での実施件数が Ａ　１０件以上 Ｂ　５～９件 Ｃ　１～４件 Ｄ　０件	（全職員） 最終評価（Ｂ）9件 各学科の特色を生かし、地域貢献活動を9件実施できた。 地元地域の方々や、小松市とも連携し、次年度も充実した活動になるよう取り組んでいく。
5	実践的な避難訓練や防災学習を通し、防災に関する意識や能力を高める。	①	学期に１回以上、防災教育活動を実施し、災害対応力の強化を図る。	全職員 学年会 各学科	昨年度は年２回の避難訓練（内１回は机上訓練）のみの取り組みであったが、より実践的な訓練や防災学習の充実させることで、防災に関する意識や能力を高める必要がある。	＜努力目標＞ 実践的な訓練や防災学習の充実させることで、防災に関する指導に努める。	防災学習において生徒に効果的な指導ができた教員が Ａ　８０％以上である。 Ｂ　７０％以上である。 Ｃ　６０％以上である。 Ｄ　５０％未満である。	（全職員） 最終評価（Ｂ） 各学期に防災に関する取組を実施する中で、教員自身の防災学習に対する必要性の認識は高まった。一方で、効果的な指導ができたと感じた教員は72％にとどまった。次年度は、より効果的な指導が行えるよう、防災教育の内容の充実を図る。
						＜満足度指標＞ 生徒の自己評価から判断する。	防災に関する知識が高まり、防災能力が身についた生徒が Ａ　８０％以上である。 Ｂ　７０％以上である。 Ｃ　６０％以上である。 Ｄ　５０％未満である。	（学年会・各学科） 最終評価（Ａ） 自宅周辺のハザードマップの確認や、複合災害を想定した訓練、専門家による講演会の実施を通して、生徒の防災に関する知識が高まり、防災能力が身に付いたと感じた生徒は9割以上に達した。次年度も引き続き、防災学習の充実に取り組んでいく。

学校関係者評価委員会の評価	・地域貢献活動「こま工Factory」の次年度に向けた効果的な周知方法についてどう考えているか。 ・防災学習における簡易マニュアルの有無および生徒向け危機管理マニュアルの配付状況はどうなっているか。 ・生徒のあいさつがしっかりとできている点は高評価である。併せて、防災学習において不審者対応訓練を取り入れることはどうか。 ・活躍している卒業生の進路や動向を在校生に紹介する機会を設けることはよいのではないか。
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策	・ホームページへの掲載を継続するとともに、授業や学校行事との兼ね合いを考慮し、無理のない範囲で地域貢献活動に取り組む。 ・防災学習における簡易マニュアルおよび生徒向け危機管理マニュアルの作成について検討し、可能なものから実施する。 ・あいさつの重要性に関する指導を継続するとともに、防災学習については今年度の取組を検証し、不審者対応や熊対策等、より実践的な内容となるよう取り組む。 ・進路指導に関わる広報誌の活用を進めるとともに、卒業生の進路や動向を可能な範囲で把握し、在校生への情報提供に取り組む。